

薬 局

薬局員として谷克巳薬局長の下に真野武男、多賀格男、川本勇、金子久和の各薬剤手、田中光清、菊野義春、原岡ミチ子、田中恵美子の各薬剤手補、雇の松岡スナ、野中富子、松永チヨノ、猪口某女、野口チヨノの各氏、傭人の西田昭子、吉岡美代子氏、小使の松田彦七氏、それに当時動員学生として天本貴子（神戸女子薬専）三苗（昭和女子薬専）の二嬢が勤務中であつた。

被爆時の状況

谷薬局長、多賀、川本薬剤手補は休暇をとつていて難を免る。

松岡、野中の両氏は事務室で、田中（光）、菊野薬剤手補と松永、三苗、天本の三氏は調剤室で、真野、金子両薬剤手と田中（恵）薬剤手補は薬局員室で、猪口氏は注射室で、野口、松田氏は製剤室で、西田、吉岡氏は薬局内で夫々被爆す。

真野、金子両薬剤手、田中（光）薬剤手補はガラス破片により重傷。
田中（恵）薬剤手補と天本嬢は即死し死体確認す。
猪口氏は死体確認せず。

松岡、松田の両氏は被爆後、穴弘法山中で死亡。松永氏は行方不明。
野中氏は九日伊良林救護所に收容、十七日頃上小島の親戚宅で死亡す。
局員の負傷はガラス破片創多く火傷は全くなかつた。

死亡者の官職並びに氏名

官 職	氏 名
薬剤手補	田 中 恵 美 子
雇	松 岡 ス ナ
"	野 中 富 子
"	松 永 チ ヨ ノ
"	猪 口 某 女
小 使	松 田 彦 七
動員学生	天 本 貴 子

あの時のこと

田 中 光 清 談

私は調剤室の中央附近にいた。つい今しがた飛行機の飛んで行く音が聞えていたので、窓の側まで行つた私は「影も形も見えん、友軍機やろ」と菊野君に話しかけ乍ら窓を離れて、そこまで戻つて来たばかりであつた。ピカツとしたと思つたら、すぐにダーンと音がして、ガラ／＼と云う音響と共に何かが頭にぶつかつて来た。よほど近くに直撃弾が落ちた様に思えた。気がついた時は自分でも知らぬうちに伏せの姿勢を取つていた。常々伏せをする練習をしていたので思わず知らずのうちにそんな姿勢を取つていたのだらう。唯、濛々として真暗な視野の中に、調

剤台の下から自分の処にさし込んでいる、一条の光線が認められる。そしてその時、誰かが遠くで私の名を呼ぶ様な気がした。それから、私の腰のあたりに何かか触っている様に思われたので、私は手をやってみた。するとそこには誰かの手があつた。振り向くと菊野君である。そしてその時になつて漸く私の名を呼んでいるのが菊野君だつたことが判つた。菊野君は私をゆすつていたのであるが、それまで何も反応がないので、菊野君は私が死んでいるものと思つていたらしい。後で考えると私は耳が遠くなつていたのである。菊野君は「早う外に出よう」と言つた。私は「菊野君、もう一寸待つとかんかい、俺たちはこう向いて伏せたけん、入口に向うとるばい、こつちに来んな」と言つてこそく、這つた、途中、菊野君と一緒に窓から出てみたが、すぐ近くに直撃弾が落ちてゐる様なので、又次々と爆弾を落されるものと思ひ、二階に逃げようと思つた。菊野君は懸命に階段を探しに行つたが「どつち向いても判らん」と云つて裏手から外に出た。

私は前頭部に傷を受けていた。最初は菊野君と一緒に歩いてしたが、まるで海岸か河岸の小石の原つばを行く様で、どこもこゝもごろ／＼していた。私はそこでつまずいた。裏の山に行くことにきめていたが、そんなことで菊野君の元気な足取りには及ばなかつた。そして遂に山道にかゝつた時、私と菊野君とは離れ／＼になつた。

私は早く外に出ようと思つたばかりで、菊野君と一緒に薬局から出たので、薬局の内部に残つた人々のことはよく知らない。そして行を共にした菊野君とも別れて、誰もがばら／＼の行動を取ることになつたのである。

田中さんは佐賀にお嫁に行くので辞めることになつていたが、辞令はまだ下りていながつた。それで一応佐賀に行かれていたのが、丁度その日薬局に遊びに来ていた。そして二階の薬局員室で金子さんと話していたのだつた、一緒に話に行つていた真野氏は薬局員室を出ようとして吹き飛ばされ、廊下の手すりの材料に押しつけられ、強か腰をやられていたという。田中さんの死骸は階段の附近で発見されたそうであるが、金子さんは意識不明になつて、あちこちさまよつていたそうである。何もかも埃で真暗くなつた中をふら／＼と歩いて行く金子さんの姿を見た人もあつたようである。金子さんはその後元氣になつていられるようだが、どこかで頭を打つて何もわからぬようになつていたのだから。真野氏はその後山にたどりついて二、三日動けなかつたのを家の人が来て連れて歸つたようである。

天本さんや三苗さんは共に希望して調剤実習に来ていたが、三苗さんは受付に近い調剤台の側に立つていたようで、ビンの破片で相当の怪我をしていたようである。三苗さんたちに限らず、薬局にいた人は殆んど放射能にやられてはいない様で、多くは物の下敷になつたか吹き飛ばされて打ちつけられてかして、打撲の為に死んだように思われる。おじいさんの松田氏はいつも蒸気の調節をしていて、薬剤室の附近でやられたらしい。

原岡さんも谷氏などと同じく休暇をとつて休んでいた様な気がするが、今はもうはつきりとは覚えていない。

穴弘法へは私は相当に早く登つたつもりだつたが、もう人で一杯だつた。皆逃げ足が早いものだと思つた。古屋野先生とは穴弘法の麓で逢つ

た。先生は丁度ナイフで自分の手術着を裂いて負傷者に包帯をしていられた。それを見て私は非常に感動した。私はこの先生の側にいたら何か情報がかかるかもしれないと思つて暫らく一緒にいた。以前から大学には医療隊の組織がつくられていた。丁度山を登つて来られた木戸助教授がみえたので、私は「医療隊はどうしますか」と云つたら、木戸助教授は「それどころじやありませんよ。あなたの家はどこですか」と問われる。私が「西山です」と答えたら「西山ならば早くこの山を越して帰りなさい。私の家は城山だから帰られません」と云われた。

私は山越しには帰らなかつたが、一度西山に寄り、田舎に疎開していた父のところに帰つた。私はすぐに放射能の強い浦上を離れたのが幸いして、症状も起らなかつた。

あの日のこと

川 本 勇 談

私は朝の九時頃休暇を取つて自宅に帰つた。それで現場に居合せずに助かつた。だから薬局内の当時の模様は知らない。午後三時過頃だったか、私は大学に再び行つてみた。全く変つてしまつていたが、山の方に行つた時、田中君の話で、薬局員のうち、菊野君と金子さんが助かつて逃げたという情報を知つただけだった。

真野氏は腰を打つて動けなかつたそうだが、私は詳しい情報を知り得なかつた。田中さんはその日わざ／＼佐賀から出て来ていたので、私共は「よか婿さんば貰うてよかつたたい」などとひやかしていた。それが爆撃で死んだのだから婿さんの顔を見たばかりの花嫁さんだった訳である。わざ／＼出て来なくてもよかつたのに出て来たのだから、可愛想だが運が悪かつたのでしよう。

薬局の跡に行つた時は三人の死体があつたが、誰が誰だか判らなかつた。

山に行つた時、調先生がいられたのでそこで後始末の手伝いをした。次々に死んで行く負傷者の手当は調先生や木戸先生がしていられたが、そこには医専の生徒の上野君ともう一人誰だつたかいて、その手伝いをしていた。私も色々なことに手をかしたが、死骸の処理もその一つだった。私共はいつも／＼死骸をかついだり、焼いたり穴を掘つたりする役目だつた。それで私共は相談して一度調先生にも死骸をかつがせようと云うことになつた。そしてある朝鮮人が死んだ時、私は調先生に「今度は焼かんで土葬しましょう」と言つた。先生は「うん、焼けば長くかゝるからそうしよう」と答えられた。それで私は又「私たちが穴を掘つておりますから先生がかついで来て下さい」と頼んだ。先生はすぐに「そうしよう」と云われた。とう／＼先生も死骸をかつがれた。そんなことは調先生も忘れておられるかも知れない。

その後二、三日手伝つた私は下痢が起つたのですつと家で寝込んだ、だから後のことも知らない。

(現、薬局勤務)